000370

弘法大師 空海全集

第七巻

筑摩書房

訳注者・解説者（五十音順）
高木訥元（たかぎ　しんげん）
高野山大学教授
築島　裕（つきしま　ひろし）
東京大学教授

弘法大師空海全集　第七巻
昭和五十九年八月二十五日　初版第一刷発行
昭和六十二年四月三十日　初版第二刷発行
編者　弘法大師空海全集編輯委員会
京都市東山区東山七条　総本山智積院内
真言宗智山派
宗祖弘法大師千百五十年御遠忌奉修局
代表　高野一能
編輯代表　宮坂宥勝
発行者　関根栄郷
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一－九一
電話　東京(291)七六五一(営業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六－四一二三
印刷　株式会社精興社
株式会社便利堂
製本　株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替致します
ISBN4-480-77007-0　C0315　Printed in Japan

弘仁三年十一月十五日於高雄山
寺受金剛界灌頂人〻歴名
阿闍梨傳法 僧廣智 僧慶俊
大學大允和氣仲世 左兵衛督 正四位下 藤原朝臣
宴

弘仁三年十二月十四日於高雄山寺受
胎藏灌頂人〻歴名

都合一百卅五人 元中太僧廿二人 沙弥卅七人 近多卅一人 者多卅五人

太僧正 僧綱 廿二人

一 僧賢榮 元興寺 大乙位 不定成就

二 僧慶俊 興福寺 宴情

三 泰範 元興寺 般若

四 泰清 般若

五 忠榮 不定成就

六 長榮 法華 般若

七 證得 東大寺 宴情

八 平智 東大寺 降三世

九 圓澄 寺 般若

十 延豐 元興寺 降三世

十一 圓環 元興寺 金剛

十二 願澄 東大寺 六字

十三 靈寶 東大寺 宴生

十四 靈勝 大寺 般若

十五 康逸 不動寺

十六 康安 般若

十七 光定 般若

十八 光仁 般若

十九 光忠 山階寺 六字

廿 惠讃 大安寺 元堂寺

廿一 惠德 元堂寺

廿二 惠隆 興福寺 金剛界

風流雲會自天翔臨
投之閱之如撫雲霧慧
惠上說妙門頂戴供養
之事似屬之冷供作
法塔何如宗兼推崇擬
隨命躋攀彼巔限以少
孤不能來面公恩与我金蘭
及宝山集會一處量商仏
法大事因故共建法幢報
仏恩徐望示悉煩勞轉
洋赴此院此所望、為
要即程宗兼状上

九月十日

東巔金蘭法兄

急投推号之餘陶尔
御香雨畏及左衛士
皆尊書状並達領
說迴以法傳揚開讀
投過此法期投雲
因之法事此之即
程廻照状上

九月十三日

急急乳源以至特
等以言来也況言起
号乃九号一聚一乃終
十日拂居將參入於
留之如待是所望
山媒石川兩大德源
渴仰望申意如
仁之陸才備禮所將
去来之迹沒日既將之
事是英、責、也因
之天之一法之廻照
九月乃

凡　例

本巻には、空海の書簡等を集成した『高野雑筆集』上・下、従来の文集に漏れていた遺文を長谷宝秀師が一本に纏めた『拾遺雑集』、並びに空海の撰述になる現存最古の字書『篆隷万象名義』全六帖の影印を収めた。

高野雑筆集・拾遺雑集

一　本文は二段組みとし、上段に訓み下し文、下段に現代口語訳を掲げ、各篇の末尾にそれぞれの語注を一括して掲げた。

一　本文中の詩については、上段の訓み下し文の後に、とくにその原文を掲出した。

一　訓み下し文、口語訳、訳注の作成にあたっては、長谷宝秀編『弘法大師全集』（増補第三版）を底本とした。

一　『高野雑筆集』には、書簡というその性質上、各篇に題名はない。そこで各篇の間を二行あきとして、区切りを明らかにした。

一　『拾遺雑集』のうち、「高雄灌頂記」「東寺講堂図帳」「東寺の塔を造り奉る材木を曳き運ぶ勧進の表」の三篇は、本文の性質上、訓み下し文と語注だけとし、口語訳を省いた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

〔訓み下し文〕

一　訓読は原則として前記『弘法大師全集』に付された訓みに従ったが、訳者の判断により、訓みを改め、補ったところも少なくない。

一　訓み下し文は、内容に従って適宜改行をほどこし、句読点を入れて読みやすくした。

一　漢字の助字等のうち、いくつかのものを仮名書きに改めた。

（例）之　他　不　無　令　振　所　有　可　為　応　自　従　与　合　被　乃

ただし、とくに意味を考えてそのままとした場合もある。

一　底本に使用されている古字・略字・俗字などの異体字は、おおむね現行の字体に改めた。

（例）羣→群　況→況　尅→剋　虚→虚　拘→拘　鈎→鉤

なお、あえて通行の字体に改めなかったものもある。

（例）辯・辨（弁）　龍（竜）　燈（灯）　慧（恵）　最（最）　蛇（蛇）　劒（剣）

一　訓み下し文のみ、仮名遣いをすべて歴史的仮名遣いとし、難読語や仏教独自の読み方をする言葉をはじめ、漢字にはできるだけ多くの振り仮名をほどこした。

一　経論などの書名には『　』を、引用文に相当する箇所には「　」を付した。

〔口語訳〕

一　下段に掲げた口語訳は、上段の訓み下し文と対照しつつ読むことができるよう、できるだけ原文に忠実に、かつ平易な訳をむねとした。

一　訳文中の（　）は、文意をとりやすくするため、原文に相当するものがない語句を訳者が補ったことを示す。

〔訳　注〕

一　専門的な術語や難解な語句には、訓み下し文に指示番号を付して、各篇ごとの末尾に一括して注記を掲げた。

一　本文中の経論などの引用箇所の出典については、注記に『大正新脩大蔵経』の該当する巻数・頁数・上、中、下段の別を、（大正一五・一五七中）のように表示した。

篆隷万象名義

一　『篆隷万象名義』は、現存する日本最古の字書として重要なものであるだけでなく、篆書、隷書等の研究資料として貴重なものである。この性質に鑑み、現存唯一の伝本である京都栂尾山高山寺所蔵の国宝原本から直接撮影を行ない、その縮小影印を収めた。

一　影印版は原本の二頁見開きごとに全六帖を順に収めた。

一　各写真版の左右の肩に掲げた（一オ）（一ウ）などの記号は、それぞれ原本の第一丁表、第一丁裏であることを示す。

一　『篆隷万象名義』の書誌その他については、解説を参照されたい。

原本の撮影を許可された高山寺の御好意に対し、深甚の謝意を表する。

目

次

凡　例……iii
高野雜筆集……高木訥元　訳注……三
拾遺雜集……高木訥元　訳注……二七
篆隷万象名義……二八九
解　説……五五

第七卷　詩文篇三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

高野雑筆集

高木訥元訳注

高野雑筆集　巻上

沙門空海言す。去むじ六月二十七日、主殿助布勢海、五彩の呉の綾錦の縁の五尺の屏風四帖を将ちて、山房に到り来れり。聖旨を奉宣して、空海をして両巻の古今の詩人の秀句を書かしむといへり。忽ちに天命を奉つて、驚悚すること喩へ難し。

空海聞く、物類は形を殊にし、事群は体を分てり。舟車は用を別にし、文武は才を異にす。若し其の能に当るときは事則ち通じて快し。用、其の宜しきを失ふときは、労すと雖も益なし。空海、元より観牛の念に躭つて、久しく返鵲の書を

沙門空海申しあげます。去る六月二十七日、主殿寮の次官、布勢海が呉国産の五色の綾錦のきれで表装された五尺の屏風四帖を持参され、高雄の山房に来られました。帝の仰言をうけて、この空海に両巻の古今の詩人の秀句を屏風に書くようにとのことでございました。思いもかけぬご下命をうけて、ただただたとえようもなく驚き入り、おそれ多く存じます。

空海の聞きおよびますに、万物はすべてその形を異にし、その営みもさまざまです。舟と車とでは用途が違い、文官と武官とはまたその本分を別にしています。だから、もしも才能の宜しきにしたがって事にあたらせるなら、すべてはうまくゆくでしょう。しかし、適材を適所に用いないときは、いかに力を尽くしても益なきことでございます。この空海はもとより修禅観法にのみ耽り、久しく書の道から遠のいています。日夜、心を仏によせて修行をいたす身には、書にいそしむ暇も、またその

絶つ。達夜数息す、誰か穿被を労せむ。終日修心す、何ぞ墨池に能へむ。人、曹喜に非ざるに、謬つて漢主の邸に対へり。辞せむと欲すれども、能はず。強ひて龍管を揮ふ。

古人の『筆勢論』に云く、書は散なりと。但、結裏を以て能とするに非ず。必ず須く心を境物に遊ばしめ、懐抱を散逸して法を四時に取り、形を万類に象るべし。此を以て妙とす。

是の故に、蒼公が風心は鳥跡に擬して翰を揮ひ、[10]王少が意気は龍爪を想つて筆を染む。蛇字は唐綜より起り、[11]虫書は秋婦に発す。[12]軒聖雲気の興、[13]務仙風韭の感、[14]垂露懸針の体、[15]鶴頭偃波の形、[16]騏驎鸞鳳の名、[17]瑞草芝英の相、是の如きの六十余体は、並びに皆人の心、物に感じて作るなり。

才能もございません。このわたしはかの書の達人、曹喜の才など微塵もないのに、あやまって聖帝のご下命をうけようとは。辞退しようにも許されないこととて、あえて筆をとりました。

古人の『筆勢論』には、「書の極意は心を万物にそそぎ、心の発揚にまかせて万物の形象を字勢にこめることにある」としるされています。だから、ただ字画が正しく美しいというだけでは、立派な書ということにはなりません。まず、必ず心を対象にこめ、おもいを対象に専注して、字勢を四季の景物にかたどり、字形を万物にかたどらねばなりません。このようにして、はじめて書の妙理をつくしたことになると申せましょう。

だから、蒼頡の集中せる心が、鳥の足あとをみて、それを筆でかたどって文字ができたといい、また王羲之は心を景物にこめて筆を染めたから、世の人びとが龍爪の書と賛嘆するような立派なかき手となりえたのです。蛇書は唐綜が蛇のからみにかたどって作り、秋胡の妻が蚕をみてできたのが虫書であります。軒轅は雲気に感興して雲書を作り、また風薤の書は務光仙人が薤の葉の風にそよぐさまに感じてできあがったといわれます。さらに曹喜は垂露の書、懸針の書といったたおやかで、みやびた書体をつくり、また鶴の頭の繊乱なるに似た書風、さざ波のごとき

或るひとの曰く、[19]筆論筆経は譬へば詩家の格律の如し。[20]詩人、声と病とを解らずむば、誰か詩什に編まむ。[21]書者、病と理とを知らずむば、何ぞ書評に預からむ。又、詩を作る者は古体を学ぶを以て妙とし、古詩を写すを以て能とせず。書も亦、古意に擬するを以て善とし、古跡に似たるを以て巧なりとせず。所以に古より、能書百家体別なる。[22]蔡邕は大いに笑ひ、[23]鍾繇は深く歎く。良に以あり。

空海、儻、[24]解書の先生に遇つて、粗、口訣を聞けり。然りと雖も、志すところ、道別にして、曾て心を留めず。今、聖雷の震響に頼りて、心地の蟄字を抜き、[26]六書の萃楚を折りて、[27]八体の英華を摘む。[28]転筆を斷態に学び、[29]超翰を草聖に擬ふ。山水を想つて擺撥し、老少に法つて終始す。君臣風化の道、上下の画に含み、夫偃波の書もございます。あるいは瑞相に由来する騏驎の書、鸞鳳の書もあれば、希有な芝英の書も同じく吉祥な相としてできたものといわれます。このようなたぐいの六十余種の書体は、いずれも、すべて人の心が物に感動して作りだされたものなのです。

ある人は「書の原理は、あたかも詩人のいう格律のようなもの」と申します。詩人にして作詩の意と韻律、および詩病を理解しなければ、どうして詩集に編まれるような一流の詩人となりえましょうや。同様に、書家もまた書の規則と道理を知らなければ、どうして一流の書としての評価をうることができましょう。作詩家は古き詩体のこころを学ぶことが肝要であり、いたずらに古詩の形体をまねるだけではよくないのです。書の道もまったく同じで、古い書風のこころを体することが大切であり、ただ筆跡のみをまねるのは決して巧者とは申せません。このゆえに、昔から能書家はあまたいても、すべて独自の風体雅致をそなえていて、高い境地に達しています。かの蔡邕が書の極意に達しえて歓喜して快哉を叫び、鍾繇が血を吐くおもいの精進をつづけて奥義をえたのも、まことに、ゆえあることといわねばなりません。

この空海は在唐のおり、たまたま解書の先生に遇い、ほぼ書の要諦を聞きえたとはいえ、しかし入唐の目的は仏道を求めることにあったがた

婦義貞の行、陰陽の点に蔵めたり。客主揖譲し、弟昆友悌あり。三〇三才変化し、四序生殺す。三一尊卑愛敬し、大小次第あり。郷里和平し、寰区粛恭す。此等の深義、悉く字字に韞めり。功を書池に謝すと雖も、竊に雅趣を庶幾ふ。三二

又、夫れ右軍、功を累ねて、猶未だ其の妙を得ず。三三衆藝、沙を弄むで、始めて其の極に会へり。自外の凡庸、何ぞ点画の奥を解らむ。何に況むや、空海耳に其の義を聞くとも、心に理を存せず。空しく筆墨を費して、忝く珍屏を汚す。一たびは悚き、一たびは懼れて、心魂飛越す。三四

時に三五晃曦、光を流して、葵藿自ら感ず。山に対して管を握るに、物に触れて興あり。自然の応、覚えずして吟咏す。輙ち三六十韻を抽むでて、敢へて後に書す。

めに、深く書の道に留意することもありませんでした。いま、にわかに聖帝のご下命をうけ、あたかも春雷のとどろきにうたれて地中の虫がはい出るように、心中にひそめる筆法を想い起こしたことでございます。さまざまな書体の精髄をえらび、運筆を鐘鼎の古い字体にならい、筆の妙味を草書の達人張伯英になぞらえましょう。山水の景物に心を集中して筆をふるい、理にかなって筆をはこび、君主の徳に臣下がなびき、夫婦の礼義、貞潔の道も、主客の謙譲の美徳も、兄弟の仲睦まじきことも、自然の正しい移り変りも、四季の順調な変化も、尊卑互いに敬愛する美風も、大小の順序も、隣里の平和なありようも、天下泰平のことわりも、これらのあらゆる深き意義をすべて一字一字の点画にこめて、声字実相の理法をあらわにしたつもりです。出来ばえのほどは遠く張英に及ばないとしても、字々にふくましめた如上の深き趣きを、なにとぞおくみとりねがわしゅう存じます。

かの王羲之とても、ひたすら書を学んで、なお奥義に達しえなかったといい、恒河の砂の数ほどの修練をかさねて、はじめて衆芸童子のように極意をうるとか申します。いわんや余他の凡庸なものには、どうして書の極意がわかりましょう。ましてや、この空海はただわずかにその要諦を聞きかじっただけのこと、心底、書の道をきわめたわけでもございい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com